

空中寫眞の判讀法に就て

空中作業會社 加 藤 直 助

空中寫眞の判讀法といつても特種の方法又は原則があるわけではない。要は平常寫眞に親むことを要件とする。然し乍ら、空中寫眞には垂直寫眞、斜寫眞、水平寫眞等の各種があること、及季節と光線の方向(時との關係)とを第一に定む可きことを忘れてはならない。垂直及斜寫眞は、其文字通りの方法にて撮影せられたもので、水平寫眞とは水平線を入れて撮影せられたものの代名詞で斜寫眞の一種である。季節は物象殊に植物落葉雪等季節の變化に随つて變更あるやうに、寫眞面上に自ら變化を生ずるし又光線は其方向によつて種々な錯覺を起すこと日常經驗する所と同様である。特に法意すべきは、通常我々は光線を上部より受けて見るやうに寫眞も光線を上方より受くるやうにして見ることは是である。さうしないと高低を反對に見誤ることがあり得るからである。

凡そ空中寫眞の判讀は各種の寫眞に就て説明するのを便とするが、其繁に堪えないから、以下その概略を述べよう。

(1)判讀に際して一通りの器具を備へる必

要がある。即ち(甲)双眼寫眞用として實體を視るものに鏡式實體鏡、双眼顯微鏡、手持双眼實體鏡、實體比較器、接眼レンズ等。(乙)擴大鏡、修整臺(陰畫原板又は陽畫原板を其儘判讀するもの)等がある。後者と同じ用をなすものに採光臺があり、共に原板を其儘判讀するのに使はれる。右の内手持双眼實體鏡は最も安價にして輕便である。

(2)各種寫眞

垂直寫眞に於いては著しく高い目標が原板中心を離るる度合に依つて、斜寫眞の傾向を帯ひるが唯其縮尺は不變である。斜寫眞は反射光線が強い爲め水面の如きは白色に現はれる垂直寫眞は全反射をするので黑色に現はれるが、原板中心を離るる度合に随つて漸次白色に現はれることを注意せねばならぬ、また水平寫眞にあつては平坦地の森林は斷雲の蔭影と見誤ることがある、山地は谷地と併行に撮影しないと死角が多い。

(3)光線と地形

光線の方向に依て地形を見誤ることがあるは前述した處であるが、光線によつて寫眞



(1)埼玉縣入間川町附近集成の一分割 $\frac{1}{6000}$ 縮尺寫眞にして、50機航空寫眞機により撮影